# 概念メタファー
# —農業を通して経済活動を見る—
## Conceptual metaphors using agriculture to interpret economic activity

山田　裕子（Yamada,Yuko）

**摘　要**

The Japanese expression “tane wo maku (to sow seeds)” is often used express economic activity, but it is originally an expression from agriculture. In other words, it is thought that humans use agriculture to express the concept of economic activity. This is known as a “conceptual metaphor”. Conceptual metaphors are a cognitive mechanism employed to explain a concept (target domain) using a well-understood phenomenon (source domain).

“Image schemas” play an important role in conceptual metaphors. Image schemas can be described as the fundamental structuring of our experience. The relationship between a source domain and a target domain within a conceptual metaphor is based on the fact that the structure of the image schema within the source domain can be maintained within the target domain. This is based on the “invariance principle”.

In this paper, we consider how agricultural expressions are used to describe economic activity, based on examples of use, and clarify how conceptual metaphor is at the basis of this.

キーワード　*概念メタファー　起点領域　目標領域　イメージスキーマ　不変性原理*

*Keywords : conceptual metaphor　source domain　target domain　image schema　invariance principle*

## １．はじめに

(1) さて、私を含め多くの経営者さんは、刈り取った収穫に一喜一憂するものです。たとえば、「今日の売上は、まあまあだった…」「今日は新規のお客がたくさん来た…」「今日は雨が降ったからお客が少なかった…」という『収穫』の部分についつい目がいきがちです。もちろん、私自身も収穫の部分は気になりますし、経営において、こういった日々の数字を気にすることはとても大切なことでもあります。ただし、こういった収穫の部分だけにフォーカスしてしまうのは、あまり賢明ではないような気がします。なぜなら、種をまくからこそ収穫があるからです。つまり、収穫が必要なら、まずは種をまかなければいけません。

（http://www.medicalcontents.com/blog/harvest/）[1]

「種をまく」と「収穫」は本来「農業」に関する表現であるが、(1)では利益を得ることを目的とする「経済活動」を表している。つまり、私たちには「経済活動」を「農業」を通して捉えるという概念レベルの営みがあると考えられる。この営みを「概念メタファー」[2]と言う。本稿では、「農業」を表す表現で「経済活動」を表すということを、実例に基づいて考察し、その基盤には「概念メタファー」が存在することを確認する。

## ２．概念メタファー

籾山(2014:98)は「概念メタファーとは、ある対象(＝目標領域)を、別のよくわかっている物事(＝起点領域)を通して理解するという認知の仕組みであり、言語の基盤を成す」としている。本節では、籾山(2014) が提示する概念メタファー《「目的のある行為」は「目的地への移動」である》[3]を例に、概念メタファーの構造と、概念メタファーの言語の基盤における役割について概観する。まず、下記の用例について籾山の考察を参考に確認する。

(2) Ａ国がＢ国における紛争の解決に乗り出したことには国際的に賛否両論がある。

（籾山 2014:99）

(3) 議論の末、今度のイベントはこの線で行こうということになった。

（籾山 2014:99）

(4) 一時は無理かと思われたが、何とか新規店舗のオープンに漕ぎ着けた。

（籾山 2014:99）

「乗り出す」「行く」「漕ぎ着ける」は、いずれも本来「目的地への移動(のある段階)」を表す表現である。「乗り出す」は〈船に乗って海に出て行く〉[4]という意味であり、「行く」は空間におけるある種の移動を表す語である。また、「漕ぎ着ける」は〈舟を漕いで、目的のところに到着させる〉という意味である。しかし、(2)の「乗り出す」は〈(紛争の解決を達成するために)行動を開始する〉ことを表し、(3)の「行く」は〈(イベントを成功させるために)物事を進める〉ことを表している。また、(4)の「漕ぎ着ける」は〈(新規店舗のオープンを)実現する〉ことを表している。つまり、本来の「目的地への移動」の意味から、「目的のある行為」の意味に拡張しているということである。このことから、この意味の拡張の基盤として、「目的のある行為」を「目的地への移動」を通して捉えるという概念メタファーが存在すると考えられる。ここで、「『目的のある行為』を『目的地への移動』を通して捉える」という概念メタファーを以下のように示す。

(5)《「目的のある行為」は「目的地への移動」である》

（籾山 2014:100）

概念メタファーは、理解したい対象をよくわかっている他の事柄を通して理解するという認知の仕組みである。なお、理解したい対象を「目標領域」(target domain)と言い、よくわかっている他の事柄を「起点領域」(source domain)と言う。

続いて、(5)の概念メタファーの起点領域と目標領域について確認する。まず、起点領域である「目的地への移動」は、私たちが身体を通して直接、繰り返し経験してきた、よくわかっている事柄である。一方、目標領域である「目的のある行為」は理解したい対象であり、(2)～(4)からもわかるように、紛争の解決やイベントを進めるためにあれこれ思考を働かせるといった、抽象的な営みや理解しにくいことを含んでいる。

さらに、検討を進める。まず、起点領域である「目的地への移動」の基本的なプロセスは、以下のように簡略化した３つの段階で示すことができる。

(6) **ある地点を出発　→　ある経路を移動　→　ある目的地に到達**

（籾山 2014:100）

(6)は、私たちが繰り返し経験してきた「目的地への移動」に基づいて形成された(5)の概念メタファーの起点領域の「イメージスキーマ」(image schema)であると考えられる。籾山(2014:100) は「イメージスキーマとは、人間が、身体を通して世界と相互作用をする中で、一般化、抽象化した形で抽出することができる(認知)図式のことである」としている。つまり、イメージスキーマは、概念メタファーの起点領域と目標領域の重要な部分を担っていると考えられる。[5] また、(2)～(4)の本来の意味と(6)の各段階は、「乗り出す」が「ある地点を出発」を表し、「行く」が「ある経路を移動」を、「漕ぎ着ける」が「ある目的地に到着」を、それぞれ表していることから、両者は対応関係にあると考えられる。一方、目標領域である「目的のある行為」の基本的なプロセスは、以下のように簡略化した３つの段階で示すことができる。

(7) **ある行為に着手　→　継続的な取り組み　→　ある目的を達成**

（籾山 2014:101）

(2)～(4)の本来の意味と(7)の各段階は、「乗り出す」が「ある行為に着手」を表し、「行く」が「継続的な取り組み」を、「漕ぎ着ける」が「ある目標を達成」を表す。さらに、(6)の「目的地への移動」の基本的なプロセスの各段階と(7)の「目的のある行為」の基本的なプロセスの各段階には対応関係があり、両者の対応関係は以下のように示すことができる。

(8) ある地点を出発 → ある経路を移動 → ある目的地に到達
↕ ↕ ↕
ある行為に着手 → 継続的な取り組み → ある目的を達成

（籾山 2014:101）

(8)で示した(6)と(7)の対応関係から、(5)の概念メタファーの起点領域である「目的地への移動」と目標領域である「目的のある行為」との間に「構造的な類似性」(structural similarity)を確認することができる。この点も(5)の概念メタファーの存在を認める重要な根拠となる。なお、この構造的な類似性は、起点領域のイメージスキーマの構造が目標領域においてそのまま維持されているという「不変性原理」(invariance principle)[6]を満たしている。さらに、この概念メタファーが存在する根拠として、私たちが、定着していない新奇な表現も理解できるということもあげられる。籾山(2014) は新奇な表現として、「滑り込んで行く」という表現が用いられた実例を提示している。

(9) 事実広田は、それまで幣原の下で三年間、欧米局長をつとめたが、それが逆に、幣原の餞別(せんべつ)のようにも見えた。これから三年オランダに出ることは、そのまま外交官生活の終着駅に滑り込んで行くことになりそうであった。

（籾山 2014:102 城山三郎『落日燃ゆ』、p.76、新潮文庫）

「終着駅に滑り込んで行く」は、本来列車に関する表現であり、列車が「最終の駅」という「ある目的地に到達」することを表している。(9)では、「外交官生活の終着駅に滑り込んで行く」で、〈外交官としての生活を無事終える〉という「ある目的の達成」を表していると理解できることも、(5)の概念メタファーが存在しているからだと考えられる。

本節では、概念メタファー《「目的のある行為」は「目的地への移動」である》を、籾山(2014)の考察に基づいて検討し、「目的地への移動」を表す表現が「目的のある行為」を表すという意味に拡張する基盤には、《「目的のある行為」は「目的地への移動」である》という概念メタファーが存在すると考えられることを確認した。また、起点領域である「目的地への移動」と目標領域である「目的のある行為」との間に構造的な類似性があること、私たちが定着していない新奇な表現も理解できることを、《「目的のある行為」は「目的地への移動」である》という概念メタファーが存在する根拠とした。

## ３．考察

本節では、「農業」に関する表現を用いて、利益を得ることを目的とする「経済活動」を表す実例を考察し、《「経済活動」は「農業」である》という概念メタファーが存在することを確

認する。[7]

### 3．1．実例の考察

まず、本来「農業」を表す意味が、「経済活動」を表す意味に拡張している実例を、「種をまく→手入れをする→収穫する」という農業のおおよそのプロセスに沿って考察する。

#### 3．1．1.「種をまく」

(10)ダイコンはポットからの植え替えが出来ないので、畑に直に種を蒔いて育てる野菜です。
（http://kateisaiennkotu.com/yasainosodatekata/konnsairui/daikonn.html）

(11)営業は、売り上げの種をまいて、育てて、収穫するパターンで終わる。収穫時期は、予想がつかないが種が育てば種の方から収穫の時期ですよと知らせてくれる。営業マンは、出会う人にどれだけ種をまけるかだ。まいた種が上手く芽を出してくれれば育っていくのを収穫まで待てば良い。
（https://kyaku.info/sales-support/330-how-to-seed.html）

「種をまく」は、〈農作物の種を畑に配置し発芽させる状態にすること〉であり、農業の初期段階の作業の１つである。一方、(11)の「売り上げの種をまく」という表現は、〈利益を得るために何らかの行動を起こすこと〉を表し、利益を得るための初期の行動の１つとして営業活動を取り上げている。

#### 3．1．2.「手入れをする」（「肥やしをやる」「芽が出る」「間引き」）

(12)作物がしっかりと育つためには、苗を植えたり種を撒いてそのまま放っておくというだけではいけません。管理をして健康的に育つように促していく事で初めて良い作物が育つのです。
（https://農家の１日.com/about/year）

(12)から、植えた苗やまいた種の手入れ・管理が農業において重要であることがわかる。農作物を手入れ・管理する作業として、「水を撒く」「草を抜く」などがあり、種まきから収穫までの期間に様々な作業が継続的に行われている。これらの作業は収穫の内容に大きく影響する。ここでは、「肥やしをやる」「間引き」という表現と手入れ・管理によって促される「芽が出る」という表現で、「経済活動」を表している実例を考察する。

(13)私の家族は、母と私たち夫婦、息子夫婦の三世代同居です。母は、野菜作りに一生懸命で、家の横にある畑によく肥しをやります。

（http://www.moralogy.jp/moralogy/cocoro/qa/qa_47.html）

（14)学習塾は農耕型のビジネスですから、自分の事業に毎日愛情と情熱という肥やしをやり続け、手間を掛ければ掛けるほど自分に跳ね返ってくるのです。要は、「自分のために自分で汗をかいてください。」ということなのです。

（http://www.meigakukan.co.jp/）

「肥やしをやる」は〈生育を促す養分となるものを農作物に与えること〉であり、収穫まで継続される農作業の１つである。一方、(14) の「愛情と情熱という肥やしをやり続ける」という表現は〈利益を得るために継続して（愛情や情熱も含む）あらゆる労力を注ぐこと〉を表している。つまり、自分の事業に対して金銭などの投資だけではなく、あらゆる労力を注ぎ続けることも、利益に反映するということである。

(15)数年前、朝日新聞から送ってもらったツタンカーメンのエンドウ豆の種をまいた。芽が出るか心配したが、隣にまいたスイートピーのかれんな芽と異なり、ずんぐりした芽が出て骨太の苗に育っていった。暖かくなるとつるが伸び出し、二メートルほどの支柱の上をたくましく伸びていった。

（『朝日新聞』（朝刊）2000.5.30 聞蔵Ⅱビジュアル）

(16)営業の成果は徐々に上がっている。台湾人の入場者は増加傾向という。今年一月、台湾のバラエティー番組のロケ地に選ばれる思わぬ副産物も得た。三月上旬には中国語の園内ガイドブックも作製し、受け入れの姿勢をさらに整える。同社は、台湾での宣伝展開も検討し始めた。「台湾の旅行会社は、東京、九州に続く国内の観光地を探している最中。仕掛けさえちゃんとすれば芽が出る」と同社販売促進部。

（『朝日新聞』（朝刊）1998.2.18 聞蔵Ⅱビジュアル）

「芽が出る」は〈種が生育し始めること〉であり、農業では種をまいた後の「肥やしをやる」などの継続的な作業で種の発芽と生育を促す。一方、(16)の「芽が出る」は〈利益を得るための投資の成果が現れ始めること〉を表している。

(17)種まきをして、待望の芽が出てきたら次の作業は「間引き」です。せっかく出てきたかわいい芽を抜くのは、とってもかわいそうな気がしてしまいますが、株と株の間に十分なスペースがないと根が太くならず、その後の生長に大きく影響してくるので、ここは心

を鬼にしてきちんと間引きをしましょう。

（https://www.iris-saien.com/p_kihon/02.html）

(18)東洋インキグループでは、電力供給不足に対してコージェネレーションシステムや自家発電機で対応するとともに、地域ごとに節電目標を設定し、空調・照明や間接・技術部門の設備の間引き運転、海外も含めた生産場所のシフト、時間シフト（早朝、夜間への稼働時間シフト）、稼働日シフト（土・日・休日と平日の振替稼働）などを実施し、電力ピークの削減を行いました。

(http://schd.toyoinkgroup.com/pdflib/sae_report/sae_report2013j.pdf#search=%27%E6%9D%B1%E6%B4%8B%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%82%AD%E3%82%B0%E3%83%AB%E3%83%BC%E3%83%97%E3%81%A7%E3%81%AF%E3%80%81%E9%9B%BB%E5%8A%9B%E4%BE%9B%E7%B5%A6%27）

「間引き」は、〈農作物をさらに成育させるために農作物の数を調整すること〉である。一方、(18)の「間引き運転」という表現は、電力不足という状況下で、〈企業内での電力使用を控えるため設備の運転を通常時よりも減少させること〉を表している。つまり、電力の使用を調整することによって企業の損失を抑えることを目的とし、このような試みは継続することで企業の利益に反映する。

### 3．1．3．「収穫」「収穫する」[8]

(19)収穫は農業の中でも一大イベントともなり、その年の作物の出来具合を判断するタイミングでもあります。

（https://農家の１日.com/about/year）

(20)スイカは漬物用以外は成熟した果実を収穫する。

（倉田久男「野菜園芸大百科４」BCCWJ）

(21)景気回復といわれる中、日本経済新聞社のまとめによると、昨年の夏のボーナス支給額は、バブル期以来の５年連続の増額となった。もちろん業種間での明暗はあるだろうが、社員にとってボーナスは、半期に一度のまさに収穫の成功感に浸る嬉しいイベントであることには間違いは無い。

（http://www.directvanqex.com/businessnavi/vol20/index.html）

(22)給料日２５日の攻防。〈中略〉スーパーが２５日以後に暴利を貪っているというのではありません。給料日前は安売りでタネを蒔き、給料日以後に「収穫」するという「戦略」に基づいているということです。２５日の給料日が多数派であると設定し、給料日前の安売りで薄くなった利益を給料日後に回収するのです。

（https://webtan.impress.co.jp/e/2007/05/23/1374）

「収穫（する）」は、〈実った農作物をとり入れること〉であり、農業の最終段階を表している。また、「収穫」は〈収穫した農作物〉のことも表す。一方、(21)の「収穫」は「ボーナス」を表している。「ボーナス」は通常、企業の半期ごとの利益に見合った現金等を従業員に還元するものであり、従業員の労働の成果が反映する。このことから、(21)の「収穫」は〈利益を得るための一連の取り組みの成果〉という意味を表していると考えられる。また、(22)の「収穫する」は〈何らかの方法で確実に利益を得ること〉を表している。

**3．1．** では、「種をまく→手入れをする→収穫する」という農業のおおよそプロセスに沿って、「農業」を表す表現が「経済活動」を表すのに用いられている実例を考察し、本来「農業」を表す意味が、「経済活動」を表す意味に拡張していることを確認した。このことから、この意味の拡張の基盤には「経済活動」を「農業」を通して捉えるという概念メタファーが存在すると考えられる。この点について、**3．2．** で検討する。

### 3．2．概念メタファーに基づく考察

**3．1．** では、「経済活動」を表すのに、「農業」を表す一連の表現が用いられている実例を考察した。その結果、「『経済活動』を『農業』を通して捉える」という概念メタファーが存在すると考えられる。この概念メタファーを以下のように示す。

(23)《「経済活動」は「農業」である》

私たちは、「種をまく→手入れをする→収穫する」という「農業」のおおよそのプロセスを知識として持っている。つまり、「農業」は、私たちにとってよくわかっている事柄である。一方、「経済活動」は、利益を得るために思考を働かせたり、利益に結び付けるための営業活動など、抽象的であったり、容易に理解できないことを含んでいる。つまり、(23)の概念メタファーの起点領域は「農業」であり、目標領域は「経済活動」ということになる。

#### 3．2．1．起点領域と目標領域の構造的な類似性

続いて、起点領域である「農業」と目標領域である「経済活動」との間に構造的な類似性を見出せることを確認する。まず、農業の「種をまく→手入れをする→収穫する」というおおよ

そのプロセスを一般化すると「農業の開始→開始後の継続的な作業→収穫する」となる。本来「農業」を表す表現との対応を確認すると、「種をまく」は「農業の開始」を表し、「手入れをする」は「作業開始後の継続的な作業」を表している。また、「収穫する」は「農業の最終段階」である。これを農業の基本的なプロセスとして以下のように示すことができる。

(24)**農業の開始　→　開始後の継続的な作業　→　収穫する**

(24)は、私たちが持っている「農業」に関する知識と農作業を経験する中で形成され、一般化された「農業」の基本的なプロセスであり、(23)の概念メタファーの起点領域のイメージスキーマであると考えられる。一方、目標領域である「経済活動」のプロセスは「利益を得るために行動を起こす→起こした行動を利益を得るまで継続する→利益を得る」と考えられる。これをさらに簡略化すると、「経済活動」の基本的なプロセスとして以下のように示すことができる。

(25)**利益を得るために行動を起こす　→　行動を継続する　→　利益を得る**

本来「農業」を表す表現と(25)との対応を確認すると、「種をまく」は「利益を得るために行動を起こす」ことを表し、「手入れをする」は「行動を継続する」ことを表し、「収穫する」は「利益を得る」ことを表している。このことから、(24)と(25)の対応関係は以下のように示すことができる。

(26)

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| **農業の開始** | → | **開始後の継続的な作業** | → | **収穫する** |
| ↕ | | ↕ | | ↕ |
| **利益を得るために行動を起こす** | → | **行動を継続する** | → | **利益を得る** |

(26)から、(24)と(25)には構造的な類似性があると考えられる。つまり、(23)の概念メタファーの起点領域である「農業」と目標領域である「経済活動」との間に構造的な類似性が存在し、このことが、まず、(23)の概念メタファーが存在する根拠となる。

### 3. 2. 2. 新奇な表現「耕す」「二毛作」「肥やしをやり合う」の考察

続いて、「耕す」「二毛作」が「経済活動」を表すのに用いられた新奇な用法と、表現自体が新奇である「肥やしをやり合う」という「経済活動」を表す表現について考察する。

(27)夏枯れする代表的業種の一つが、紳士服店です。クールビズなどの商品はあるとしても、夏場にはスーツを着たくない、というのが多くのビジネスマンのホンネですから。

この店は例年、ＤＭは実施してきました。でも、レスポンス率は低いまま。いくらお得なセールをしたところで、猛暑の時期にスーツを作りたいと思う人は、そうはいません。そこで発想を変えて、真夏は、商品を売り込む時期ではなく、顧客満足を耕す時期にすることを提案しました。

（著者不詳「第 136 回耕す商業への転換」NLT）

「耕す」は〈田畑の状態を整えること〉を表し、「種をまく」よりも前に行われる農業の開始段階の作業であり、農業に欠かすことができない作業である。一方、(27)の「顧客満足を耕す」という表現は、〈(顧客対応に重点を置き)新たな利益を得る準備をすること〉を表している。つまり、売り上げが下がる真夏は、無理に売り上げを上げるのではなく、顧客への対応に力を入れ、秋以降の売り上げにつなげることを表している。

(28)セミナーは個人投資家向けだった。マンションの一室を購入するか借りるかして民泊用に貸してもうけるのが、いまや人気の投資になっている。講師の男性によると、家賃月７万円が相場の物件でも、民泊で貸せば月４０万円近い収入を得られる場合もあるという。新法施行後は半年ほどしか民泊用に貸せなくなるが、男性は「二毛作で高収益を望める」。残る半年はマンスリーマンションやイベントスペースとして貸し出せばよいのだ、という。

（『朝日新聞』（朝刊）2017. 7. 14 聞蔵Ⅱビジュアル）

「二毛作」は〈１つの田畑で時期をずらして２種類の農作物を栽培すること〉である。(28)の「二毛作」は、マンションの一室を半年は「民泊用」として貸し出し、もう半年を「マンスリーマンション」や「イベントスペース」として貸し出すことで、1 つの部屋を有効活用し、より多くの利益を得ることを表している。つまり、(28)の「二毛作」は〈２つの行動をとることによって、さらに利益を得ること〉を表している。

(29)滋賀県の朽木村では補助金をもらって農業振興をしていたが、朝市を始め、村の外の人と付き合うようになって空気が変わった。「おばあちゃんがつくったさばずしを食べたい」と言われ、おばあちゃんの元気が出る。足を引っ張り合う関係から、いわば「肥やしをやり合う関係」に変わっていったという。

（『朝日新聞』（朝刊）1998. 11. 29 聞蔵Ⅱビジュアル）

(29)の「肥やしをやり合う」という表現は表現自体が新奇であるが、私たちは〈人と人が利益を得るためにお互いに協力すること〉という「経済活動」を表していると理解することができる。以上のように、定着していない新奇な表現も理解できるのは「経済活動」を「農業」を通

して理解するという認知の営みに基づいているからだと考えられる。このことも、《「経済活動」は「農業」である》という概念メタファーが存在する根拠となる。

## 4．まとめ

本稿では、「農業」を表す表現を用いて「経済活動」を表すということの基盤に、《「経済活動」は「農業」である》という概念メタファーが存在することを確認した。この概念メタファーの存在について、起点領域である「農業」と目標領域である「経済活動」との間に構造的な類似性が見出せることと、定着していない新奇な表現も理解できることを根拠とした。

## 注

1　本稿では考察対象とする表現には実線を施し、注目すべき表現には点線を施してある。

2　Lakoff and Johnson(1980)は修辞学の領域とされていたメタファーを人間の認知の営みとして捉え、認知言語学におけるメタファー研究の礎となる「概念メタファー」を提唱した。高尾(2003:198)は「概念メタファー論では，メタファーの使用は単なる文体上の現象であるという見方を否定する。むしろ，メタファーは，ある物事を概念化し，認識するために用いられる認知的な仕組みであると考えられている。私たちは，メタファーによって，すでにもっている知識を新しい領域に拡張して当てはめ，その領域を類比的に理解していくことができる。このように，メタファーは人間のもつ柔軟な認知能力の一部分をなすものと捉えられている」としている。また、佐藤(1992[＝1978])はメタファーを検討する中で、「花のイメージが男の凛々しさにも女のしとやかさにもかさなりうる」(p.125)というように、花のイメージを通して人間を理解するという概念メタファーを先取りした考え方を述べている。

3　本稿では籾山(2014)の記述に従い、概念メタファーを《　》に括って記述する。

4　本稿では意味を〈　〉に括って記述する。

5　谷口(2003)は概念メタファーとイメージスキーマの関連について「Lakoff and Johnson(1980)以降，メタファーは概念的問題として認識されるようになり，その作用やシステムについての理論的な整備が進められていった．その結果，1980 年代中頃には，メタファーが『イメージ・スキーマ』(image schema)を異なる概念領域に写像するものであるという，『メタファー写像』(metaphorical mapping)が提案されるようになる」(p.45)とし，その定義を「メタファーは，起点領域(source domain)から目標領域(target domain)への写像である」(p.45)「写像される対象の主要なものが，イメージ・スキーマである」(p.45)としている。

6　「不変性原理」は、Lakoff (1990)が「メタファ的写像はソース領域の認知トポロジー（つまり，イメージ･スキーマ構造）を維持する」(杉本訳 2000:24)とした「不変性仮説」(invariance

hypothesis)を発展させた考え方である。谷口(2003:62)は、「不変性原理に先立ち，Lakoff (1990)は，『メタファー写像は起点領域のイメージ・スキーマ構造を保持する』という，『不変性仮説』(Invariance Hypothesis)を提案していた．これに，『目標領域と矛盾しない』ということをイメージ・スキーマ保持の条件として付け加えたのが，『不変性原理』である」としている。

7 籾山(2006)は概念メタファーに基づき、「人間以外のものを通して人間を見る、あるいは理解する」(p.11)ことについて日本語の実例を多数提示し、考察している。

8 「収穫（する）」に関連する表現として「豊作」と「不作」がある。これらは、本来収穫内容の評価を表すが、利益を左右する新製品の評価という「経済活動」に関することも表す。実例は、以下の通りである。

(i) 東名阪エリアでは、大手食品卸売業の恒例の展示会がピークを迎えており、2017 年春夏向け新商品が続々と発表されている。今シーズンはタイフード・タイ料理メニューの新商品が豊作で、紹介しきれないぐらいのメーカーから続々と発売される予定だ。
（http://blog.livedoor.jp/ma888tsu/archives/52037114.html）

(ii) 「日本カー・オブ・ザ・イヤー2016-2017」の「10 ベストカー」が選出されました。今年、とくに上半期は新車不作といえるほどフルモデルチェンジ、ブランニューモデルが少なく、また複数の要因で当初の発売予定から延期するモデルもいくつかありました。
（https://clicccar.com/2016/11/09/415230/）

## 参考（引用）文献

佐藤信夫(1992[＝1978])『レトリック感覚』講談社学術文庫

高尾享幸(2003)「第５章メタファー表現の意味と概念化」松本曜編『認知意味論』, pp.187-249. 大修館書店

谷口一美(2003)『認知意味論の新展開　メタファーとメトニミー』研究社

籾山洋介(2006)『日本語は人間をどう見ているか』研究社

籾山洋介(2014)『日本語研究のための認知言語学』研究社

辻幸夫編(2013)『新編　認知言語学キーワード事典』研究社

Lakoff, George(1990) “The Invariance Hypothesis: Is Abstract Reason Based on Image-Schemas?” *Cognitive Linguistics*1, pp.39-74(杉本孝司訳(2000)「不変性仮説－抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか？」坂原茂編『認知言語学の発展』,pp.1-59.ひつじ書房)

Lakoff, George.and Mark Johnson (1980)*Metaphors We Live By*.The University of Chicago Press.(渡

部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳(1986)『レトリックと人生』大修館書店)

## 用例出典

朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアル http://database.asahi.com/librarey2/
現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言（BCCWJ）http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search/
NINJAL-LWP for TWC (NLT) http://nlt.tsukuba.lagoinst.info/search/
検索エンジン Yahoo! Japan http://www.yahoo.co.jp/